

中国華南における不落家の起源・形成

桑 名 晶 子

目次

はじめに

1 珠江デルタ不落家の形成

2 華南諸民族にみられる不落家

3 珠江デルタ社会・文化の漢化

4 不落家の衰退

まとめ

注釈

参考文献

はじめに

清末民国期、蚕糸業の興きた広東珠江デルタの農村地域を中心した未婚女性の共同組織、特異な結婚形態（不落家）

の存在が地方史・風俗史の記述により知られている。「不落家」とは婚礼後、妻が直ちに夫方居住を開始するのではなく、一定期間年に数回（夫方からの要請、祭日）の夫方訪問以外は婚前と同様に実家において労働を続けながら居住し、三、四年後に夫方居住を開始する結婚形態である。婚礼後直ちに夫方居住を開始し、夫方の労働に従事する形態が普通であり、中国文化であるなら、不落家のような形態は特異な慣習であり中国文化からの逸脱とみなされるのは当然である。それゆえ、興味意識レベルで記述されるに止どまり、その内容は明らかにされず、分析・研究もなされないままであった。

中国では一九五七年の反右派闘争以後、文化人類学研究は否認され、中国人研究者による研究は行われず、欧米人研究者も大陸での研究活動は制限を受けた。しかし、デルタの不落家に関する研究はHo It Chongが、その目的は不

落家に関してでなかったが、インタビューによって不落家の情報を得たことに始まり^①、Marjorie Topleyが論文「Marriage resistance in Rural Kuangtung」の中でインタビューと文献を駆使して不落家・拒婚の形成・維持、衰退のそれぞれの様子と要因の追究を試み、いわばデルタの結婚、女性組織の解明を目的とする研究がなされることになった。その後、Stockfordが一九七九年に清末民国のデルタ出身の女性一五〇人（調査当時香港に居住）を対象にインタビューを行い、それらと文献をまとめ『Daughters of the Canton Delta』を出版し、不落家とその他の結婚形態の全容を明らかにした。

Topleyは不落家、自梳女をmarriage-resistance（拒婚）であり、伝統的形態から逸脱した形態であるとみなし、地域文化・当時の経済変化を背景に拒婚行動は蚕糸業雇用による女性の経済的な特権地位によって発生したと分析している。しかし、StockfordはTopleyの見解に異議を唱え、不落家は拒婚ではなく珠江デルタに広くみられた伝統的婚姻形態であり、蚕糸業に従事することで経済的特権地位を得た女性が伝統的結婚形態である不落家に抵抗して様々なmarriage-resistance（拒婚）を起こしたと分析した。これらの拒婚、compensation marriage（代償結婚とここでは呼ぶ）・自梳女・冥婚は本来中国に広くみられる伝統

的結婚形態であるが、清末民国期のデルタでは女性の要求に合致するよう変形し、本来の形態とは異なる形態を呈するようになり、更に女性の拒婚行動を促進する役割を担うことになったと彼は述べている。StockfordとTopleyは自梳女、不落家等を異なる概念で捉えている。Topleyの研究はデルタの結婚形態の完全な把握、分析には至っていない。私はStockfordの「不落家はデルタの伝統的結婚形態であった」との解釈に同意したい。

これまでの研究では、文献の都合により不落家がみられた時期（清末民国期）の結婚形態・社会状況は明らかにされたが、その形成の経緯に関しては明らかにされていない。インタビュー調査でも清末民国期とそれ以降の状況を窺えるにすぎず、不落家の形成に関する研究はこれまでのところなされていない。Stockfordは不落家の形成は「local non-Chinese（地方非中国）の初期の合併」つまり中国文化を持たない周辺民族グループの古く逆上った時代の合併、又は「Han-Chinese culture（漢族中国文化）」を伴ったnon-Han culture（非中国文化）つまり漢族中国文化をも併せ持った周辺民族文化であると推測している。不落家は珠江デルタにみられた結婚形態であるのみならず、華南・華東の少数民族、福建省等各所で見られていた。Stockfordは中国化の影響の少ない地域では非中国文化である特

中国華南における不落家の起源・形成（桑名）

色は不落家にみられ、典型的中国文化の特色は不落家の行われる地域ではみられず、不落家やその他の特殊な地方文化は不落家の行われる地域と周辺の少数民族グループの中で調査されるべきだと述べている。つまり不落家の形成は完全な中国文化の文脈で追究していくのではなく、少数民族やregionalな地方文化との関連の中で追究すべきであることが、今後の課題である。そこで私はこの観点より不落家の形成の要因を推測していきたいと思う。先ず、Stockfordによるインフォーマントへのインタビューを利用し、デルタの不落家の意義を探り形成を促した要因・社会状況を推察し（1章）、デルタ以外の地域でみられる不落家とその社会・文化の把握、これらとデルタとの比較（2章）、デルタの社会・文化を歴史的に明らかにし（3章）、デルタ地域での清末民国期の不落家の衰退をみて（4章）、最後に結論を出してみたいと思う。

1 珠江デルタ不落家の形成

Stockfordは清末期のデルタの代償結婚は女性の蚕糸業経済活動によって伝統である不落家に抗した結果、形成されたとその形成要因を明らかにした。しかし、不落家の形成要因については△伝統▽であることの他に、非中国文化との関連を述べているだけであることは前述した。ここで

はStockfordのインフォーマント達の証言よりデルタの不落家、デルタの女性の生活を概観し、不落家の機能をみていく。

娘は一七〜一九歳になると婚約、結婚をする。婚礼後は直ちに夫方に居住するのではなく、引き続き実家居住する。婚礼後の夫婦間の交流は年に数回の妻による夫方への訪問である。この訪問は大切な年中行事のある日や夫方の家族の誕生日、夫方からの要請の時に行われる。訪問する場合、必ず夫方からの出迎えがあり、出迎えにつき従って夫方へ向かう。年数が経つごとに夫方からの要請が増え訪問もたび重なり、最終的には婚礼後三〜四年を経て妊娠を契機に夫方居住を開始する。

これがデルタの伝統的結婚形態、△不落家▽である。伝統であるが故にそれから逸脱した行為は社会的非難を浴びることになる。婚礼後3年にも満たないうちの妊娠は恥ずべきことであり、社会的に望まれない。早期の妊娠を避ける為、形式的ではあるが妻は夫方への訪問を拒否し、夫方も妻の夫方訪問の拒否を期待した。

実家居住期間、娘は昼間は実家での労働（家庭経済への貢献・主に蚕糸業）に従事し、夜間は女仔屋で同世代の娘達と過ごし様々な活動を行った。この生活は不落家期においても続いた。（但し、女仔屋での夜間時の居住は止め、

単なる訪問を行うのみになった例もある。)不落家期も未婚時とは似た生活を送っている。不落家期の特徴である夫方への訪問はその初期には妻は自分が消費する食糧・薪・水は総て実家より持参し、夫方とは別に調理した。また、夫方での雑務・家事にも関与しなかった。しかし、訪問も度重なるうちに消費は夫方に頼り、雑務・家事に従事し、祖先祭祀にも携わるようになる。夫方居住開始後は完全に夫方での家事、祖先祭祀、出産・育児に従事し、義母の監督下におかれ、行動が制約されることになる。実家居住期と夫方居住期の生活形態は大きく異なっている。実家居住期においては女仔屋活動にみられるように比較的自由で、 \wedge 家 \vee に束縛されない個人的活動が認められ、魅力的な生活を享受していた。それに対し夫方居住期では \wedge 家 \vee の間としての行動が期待される。ここにおいて不落家は妻にとっての一種の実家居住の延長作戦でなかったのではないだろうか。また、それは娘の経済活動の恩恵を受ける実家方にとっても有利な展開ではある。では、夫方にとってはどうか。実家居住から夫方居住への急速な環境変化は嫁と夫方の関係を不安定にし、摩擦・衝突を起こす可能性が強いと考えられる。しかも、精神的に未発達な若い娘では尚更のことであろう。このような可能性が強い場合、婚礼によって確実に婚姻関係を成立させた後に嫁の発達を

待つ期間・互いの関係の安定を確立させる期間として、夫方も不落家の恩恵を受けているのではないだろうか。そしてまたもう一点考えられることは妊娠・出産によって嫁として認知するという心理が夫方に働いているのではないだろうか。ここでは簡単に不落家の果たす機能を娘、実家、夫方の三方面からみてみた。但し、以上述べたことはあくまで推測に過ぎない。

2 華南諸民族にみられる不落家

1章ではデルタにみられる不落家の実態より不落家の機能を推測した。ここでは中国少数民族研究者による調査よりデルタ以外で不落家のみられる地域の社会の特質・不落家を挙げ、デルタの社会・不落家と比較し不落家の行われる社会にみられる共通点・相違点を見出し、いかなる社会環境の下で不落家が形成・存続していくことになったのかをみていく。

デルタは父系制・父権制社会である。女子労働は比較的積極であり未婚女性の屋外労働もみられるが、既婚女性は専ら出産・育児・家屋内での経済活動に従事している。少数民族では過去に母系制・母権制であったと推測される例が多くみられた。しかしデルタの過去に逆上った社会形態に関する資料や、推測を見いだすことができなかったこと

中国華南における不落家の起源・形成（桑名）

と単に父系、母系の概念で社会の性質を特定して、婚姻習慣の比較、論議をすることの危険性より父系・母系という環境が不落家の形成に直接的な影響を及ぼすと断定することはできない。

婚前生活に関してデルタでは女仔屋組織がみられデルタ不落家の形成との関連が考えられるが、少数民族にはこのような未婚女性の組織的社会活動をみいだすことはできなかった。文献に記載された各少数民族の婚前生活の「自由」も明確な基準を打ち出すことができず、多様である。もし男女社交活動、男女交際、性行動に焦点をあてこれらを「自由」と認めるならば、デルタと少数民族の婚前生活の自由の意味は異なることになる。エバーハルトは妊娠・出産に関して次のように述べている。

「婚前、不落家期の性生活の自由は男にとって自分の子でない子の出産に直面することもある。このような事態は当然好ましくないことであるから第一子には家督相続が認められず、二番目の息子から適用される。純潔が結婚の絶対必要条件であった東アジアではこの風習は異例である。

「処女は皆体内に毒をもっており、その毒を自分を初めて所有する男に移す。その男は当然死ぬことになるので男は処女とは結婚しない。結婚すべき女性は処女ではないほうがいい」という観念があり、この観念を反映させた物語、

民話が華南、日本、一九世紀の広東にあった。」

これにより純潔が重んじられる社会ばかりではなかったことが認められる。黎族に正式でない性関係が社会上認知されている例が認められた。黎族の場合「処女の毒」ではなく「生殖能力への賛美」故、社会的認知を得たのである。他方デルタでは社会上比較強い男女関係の制約があったと考えられる。「Dong」は中山県の男子屋、デルタの女仔屋の機能を家の人口密集の緩和、女の慎ましさと挙げている。SpencerとBarrettは中山県では家に結婚適齢期の娘・若い女がいた場合、未婚男性は必ず男子屋に夜間居住しなければならず異性が互いに別の部屋で睡眠を取る必要性を挙げている。又、もし家がいくつかの寝室を備える程の大きさであれば未婚男性は男子屋に夜間居住する必要はなかったと述べており、中山県の男子屋は同じ家の男女が同じ狭い空間で睡眠をとることを避ける機能をもっていたと推測できる。つまり近親相姦の回避であった。広州では婚姻時に妻が処女でないことが発覚し、妻を実家に送り返した例がみられ、これは近親相姦であったと推測されている。デルタはその環境により海賊の襲撃を受けやすい地域であった。貞節を重んじるあまり、海賊に辱めを受けるのであれば自ら死をも選択するという考えが彼女たちを自殺に追いやった。海賊の襲撃を恐れ、父母により防衛

力のあるより大きい家である夫方での早期の同居を促された例もみられる。このように貞節を重んじる觀念が強くなると時には夫との關係を拒み死を選択した女性たちをうみだすことになったと考えられる。デルタでは金蘭会「契」と呼ばれた未婚女性集団がみられ結婚を拒否し夫との性關係を禁じ相互に監視しあった女性組織の例がいくつかみられたもののその普遍性は定かでない。但し彼女たちは結婚後の家庭生活の繁雜さを嫌ひ夫との性關係は拒否する一方で、他の男性との恋愛關係を結んでいるとの指摘もある。文献の性質上真偽のほどは定かではないがデルタでは男女關係は社会上の制約はあるものの必ずしも守られているものではなかったと考えられる。黎族の「姐妹寮房」はデルタの女仔屋に類似した形態ではあるが自由な男女交際の場という点で女仔屋とは異なる。

デルタでは婚約・婚禮は早期に行われるものの不落家を行うため同居開始は二〇歳、又はそれ以降となる。二〇歳以降の同居開始は他の漢族に比べて比較的遅い。不落家のみられる他の少数民族においてもこのことは同様である。デルタでは童養媳（幼時に婚約し幼い妻が夫方に同居し、年下の夫の世話や家事を行いながら成長を待ち、成長後、夫婦生活・家庭生活を営む）はみられなかった。童養媳は早婚の例であるが不落家形成とは別の力によって形成さ

れた。童養媳は早期の婚約・婚禮・妻の夫方居住であり夫方で妻の成長を待つのに対し、不落家は早期に婚約・婚禮が行われるものの妻の夫方居住の延期であり実家で成長を待つ。清末民国期のデルタに多数派結婚の不落家に対し少数派結婚として拒婚が出現したがデルタ以外の中国文化地域でみられた少数派結婚は童養媳である。陳秀英^⑤は不落家の形成要因は早婚制であると述べている。早期の同居開始では若い夫婦が家庭生活を築くのに耐えない。そのため互いに成長を遂げるまでの期間を要し、それが不落家となる。確かに早婚は人間の精神的・肉体的発達過程を無視した弊害のある婚姻形態である。不落家は早期の婚約・婚禮がみられる社会で早期の同居を避ける作用が働いて形成されたと考えられる。

少数民族、デルタ共に妊娠を契機に夫方居住を開始する。少数民族においてもデルタにおいても嫁の役割は出産であり、この役割を果たして嫁として認知される。エバーハルトはこのことに関して次のように述べている。

「南方の辺境文化においても結婚は子供が生まれてこそ成式なものとなる。結婚の同意はそのこと以前になされるとはいえず、子供が生まれるまでは法律的に拘束するものではない。中国高文化でも結婚が正式なものとなるのは法的ではないが道義上子供が生まれてからだと考えられる。民

中国華南における不落家の起源・形成（桑名）

間の道義と法は必ずしもつながりのあるものではなかった。父系社会でも子供は結婚の最も重要な要素で何よりも先に女はこの目的を達成せねばならないのである。」

少数民族、デルタ共に祭日、夫方の重要な行事の際の訪問、更に少数民族には農繁期の夫方への手伝いとしての訪問がみられる。この訪問は嫁の夫方への貢献であり、大きな役割である。苗族の夫方への訪問の際に夫方の台所用品との抵触を回避し、夫方の家族とは別に食事を用意する習慣はデルタにおける妻の夫方での消費は実家より携帯するという習慣に類似している。この習慣から未だ出産、同居に至らない嫁を同じ家族の一員として扱っていない様子が明らかである。

不落家のみられる社会では娘の出嫁に際し実家、娘自身にその出嫁を悲しむ惜しむ気持ちを問答歌や泣き歌という行動に託して表現する行為が全般的にみられる。しかしこれは長い伝統の中で次第に形式的な習慣になっていった。このような歌は民国期の広州市郊外の旧鳳凰村でみられたり（牧野、一九八五）Stockfordのインフォーマントの証言にもみられる。少数民族にみられた出嫁の際の双方の家の駆け引きも問答歌や泣き歌と同様の役割を果たしている。実家方における娘の位置付けがこのような習慣より窺うことができる。

この章ではデルタ以外の地域でみられる不落家とその社会の特徴を挙げ、デルタの不落家・社会と比較し共通点を見いだし不落家を形成する社会像・要因を探ろうと試みたが必ずしも意図通りに最大公約的にその共通点を見いだすことはできなかった。しかし不落家のみられる社会にほぼ共通して早婚（早期の婚約・婚禮）現象がみられることより不落家にはまだ完全な成長を遂げていない娘たちの夫方居住を回避する力が働き、人間の自然な精神的・身体的発達に合った通過儀礼を行うという点に意義があるのではないだろうか。

今回の研究で使った少数民族に関する資料は各民族の家族社会・婚姻を概観したものにすぎずその信憑性はやや疑わしい。今後、各少数民族に関する詳細な調査を行った資料を基に不落家を追究していく必要がある。

1章ではデルタの不落家を形成する力は実家方の娘による実家居住期の労働への依存、娘の実家居住期の環境・生活への思慕、夫方の妊娠・出産を通しての嫁の認知・嫁の成長の期待の三つの側で働いていると推測した。推測の枠を越えることはできないが少数民族との比較を通していくつかの類似点が見られたことにより1章での推測はやはり妥当であると思われる。エバーハルトは社会心理学的・社会学的によってのみ説明・解明する試みを批判している。

確かに心理的な面より社会現象を論じることが危険である。1章ではデルタの不落家の形成の要因を心理的な面より捉えて結論をだすことしかできず、この章でもやはり心理的な面に依存して少数民族の不落家をみていく傾向に陥ってしまうことになった事は否めない。

3 珠江デルタ社会・文化の漢化

珠江デルタにみられた不落家は華南・華東の少数民族地域に広く分布してみられ、その形態も類似したものであった。デルタの社会・婚姻には少数民族の社会・婚姻に類似する点がいくつかみられ、北方中国文化の枠では捉えきれない社会であることが明らかになった。ではデルタの社会・文化にみられる非漢族性・漢族性の混在はどのように形成されたのか、デルタ住民のルーツは、どのような歴史的变化を辿ってきたのか、この章ではこれらの疑問を説明してきたい。

秦の始皇帝は嶺南計略の際に桂林郡、南海郡、象郡を設置し広東に漢民族の最初の政治的進出を果たした（南海郡は広州をその郡治とした）。その後秦末の混乱に乗じ南海郡の龍川県令趙佗は桂林郡、象郡を併せ、南海郡治の番禺（広州）によって自立し南越国を建てた。南越国に関し『アジア歴史事典』では「秦末漢初、中国人趙氏を君主と

し広東を中心に独立国となったが支配階級は中国人であったにせよ被支配階級の大部分は越族であったといつてよい。今日広東省の別名を粵と称しているのはその名残である。」とある。被支配階級である越族とは当時中国南部に広く分布した多数の少数民族の総称であり1つの民族の呼称ではない。牧野巽氏は「漢代に珠江デルタを中心に嶺南の地に強大な勢力を誇った南越国はその中核にはその王趙佗をはじめとする漢人があったとしてもタイ族をその主要な構成要素としたであろう。」と述べ、古代より嶺南の地に居住し続けた原住民はタイ族であると推測している。秦の始皇帝、趙佗による支配は広東の漢化の第一歩ではあるが被支配者である居住民は漢族ではない原住民であった。その後漢の武帝が南越国を滅ぼし北方の漢民族の流入が続いた。南海航路に位置する広州は古くから貿易、政治の關係上漢族の根拠地となりその周囲に古くから漢語の一方言が形成されていたことは疑いないが南海航路に熟達している住民も主力となっていたと考えられる。『隋書』譙国夫人伝によると夫人が番禺の王仲宣の乱を平らげたとある。又、夫人が裴矩とともに嶺南を鎮撫した時にはその他の地域の首領とともに番禺に近いデルタの一角にある岡州（広東省新会県）の首領馮嶺翁（番禺及びその西方の地域を政治的にも軍事的にも掌握していた）が服属したとあり漢化は更

中国華南における不落家の起源・形成（桑名）

に進行した。しかし以上述べた漢化は支配者レベルにおいてのことであり多くの原住民はその社会・文化を固持していたのではないだろうか。多くの歴史書によると嶺南は宋代まで蛮漢雜居していたことが分かる。最も開発の進んだ広州においてすら唐の中期以後まで蛮民が雜居していた。歴史書のなかで唐末より宋代にかけて原住民と漢族との通婚がみられる。『太平實字記』巻一に広州の風俗を「文は經史に通じ、武は弓弩に便なり（通熟しているの意）婚家礼儀はすこぶる夏と同じ」と述べており、広州の漢化の進行が伺える。牧野氏は「しかしこのようなことを最近の變化として特筆しなければならなかったことにまだこの地方の漢化はやっとその初歩を歩みだしたことにすぎないことを示している。」と述べている。「旧唐書」巻一七七盧鈞伝によると唐末開成元年に嶺南節度使となった盧鈞は「土人が蠻獠と雜居し婚娶あい通じ吏がこれを撓めるとあい誘って乱をなすので盧鈞は到りて法をたてて華・蠻をして異処して婚娶通ぜらしめ蠻人は田を立てることを得ざらしめたのでこれによって徼外が肅清されあい犯さなくなった。」と述べている。ここにいう土人は広東地方の土着の漢族を指している。この土人は蠻獠と雜居するだけでなく、官吏に不平をもつと婚姻を通じ蠻獠とあい結んで反乱を起こす形勢にあった。蠻獠に田宅を立てることを禁じたことより

土着した漢民族が原住民と密接な關係を持っていたことが実証される。又、盧鈞伝の前文に「盧鈞が蠻舶との交易の利を貪らず、又貞元（南方に唐の勢力が伸びた時代）以来衣冠の罪を得て嶺表に流放された者が物故して子孫が貧悴なものに種々恩恵を施したのでこれによって山越の俗もその徳義に服す」とあり広州の州城が周囲の原住民との密接な關連がここにもみられると牧野氏は述べている。漢民族と原住民の通婚によって原住民の婚姻が漢化されていった点は漢族、原住民の文化の融合を考えるうえで興味深い。

非漢族の漢化志向として漢族をとりまく非漢族にその出自を漢族であると称した例が中国各地で多くみられた。嶺南では唐末南漢劉氏の南遷説、珠江流域の南雄珠幾巷説^⑤がその主な例である。河原正博氏は「かかる傾向は漢人の低文化地区への膨張發展及びそれに伴う文化民族的交渉に付随して起これる現象の如しである」と述べている。つまり氏は漢族文化に比べ低次の文化を持つ地域での漢族の發展の場合、原住民がその出自を漢族に求めることで漢族高次文化の保持を誇示し、更に自ら漢族文化を摂取し漢化を促進させることになるとみている。牧野氏は珠江流域、珠江デルタに居住する宗族の族譜のいくつかに原籍南雄珠幾巷説をとっていることに注目し、彼らがこの説をとり、敢

えて漢族であること誇示することによって宗族・家の結合を強めたのではないかと推測した。氏は「南雄伝説が広州付近に発生し拡大したであろう元・明の頃はまたこの地の住民が完全に華化し終わった時期に相当しているのではないか」と述べている。言語学では現代の広東語の中に少なくとも隋・唐時代に起源を持つ古音の保存されていることは有名な事実である。広州市が古くから貿易や政治の關係上漢族の根拠地となりその周囲に古くから漢語の一方言が形成されていたことは疑いがないということは既に述べた。しかしこの方言が真に有力な方言として成長するにはその周囲の農村民の同化を必要とした。この同化は恐らく明代になって完成したと牧野氏は推測している。氏の南雄伝説・言語学の解釈よりデルタには古くよりデルタに居住していた原住民が存在していたこと、當時は漢族文化を持ち合わせていなかったこと、更に原住民の漢化は明代に完成したことがいえる。しかし漢化は完全には達成されなかったのではと私は推測する。南雄伝説の浸透は彼ら自身のアイデンティティを北方の中国文化に求めようとした意識の問題であり、彼らの社会で長年伝えられてきた固有の文化・習俗の完全な消失との関連は必ずしも深いとはいえないと考えられる。つまりデルタではその伝統が不落家・女仔屋であったのではないだろうか。恐らく清末民国のデル

タにみられた不落家・女仔屋は原住民の固有の婚姻形態が漢化の進行の下で北方中国文化の影響を受け続けた結果みられるようになったと推測できる。その後続く漢化は不落家を変容させ、更に縮小・衰退へと向かわせることになるだろう。

4 不落家の衰退

3章ではデルタの不落家は本来はデルタ原住民の固有の文化であり北方中国文化の影響を受けつつ原住民が完全に漢化したといわれる明代以降、清末期までみられた婚俗であったと推測した。不落家は清末期には順德県を中心に南海県、番禺県の一部でしかみられていない。不落家は清末民国期の蚕糸業の盛興・製糸工場によって経済活動のチャンスを得た女性たちの出現によって更に代償結婚、自梳女、冥婚という特種な結婚形態を生んだ。しかしその後の広州の蚕糸業の衰退と共に不落家とその他の結婚形態は急速に廃れることになった。だが不落家の衰退に関しては3章で述べたように別の捉え方もある。完全に漢化したとされる社会の中でも不落家だけは固有の結婚形態として存続し、社会の変容・引き続く漢化は緩やかに固有の結婚形態を衰退させ、その時期が清末民国期に当たったとも考えられる。ここでは二つの衰退のタイプを見ていくことにす

る。

・ 社会変容・漢化に伴う緩やかな衰退

Stockfordのあな一人のインフォーマントは婚礼後も不落家の習慣に従い農作業の手伝いをしながら実家居住を継続し、三、四年経過することが普通の形態であるが、彼女の場合、不落家の期間が極端に短かったとその理由と共に証言している。婚礼後約一年間半の実家居住を経過した頃、海賊集団が彼女の実家の村を襲撃するという事件が起きた。海賊集団の襲撃に耐え得る程の防衛力のない実家は娘の身を案じ、娘の早期の夫方居住を促すことになった。（この事例では夫方は娘の実家に比べて裕福であり自己防衛力があつた。）これは特別な環境下において家の相対的な力関係が不落家に影響した例である。社会・経済不安の中で人間の身を守っていくことが困難である場合守っていくとする力が働くのは当然である。上記は偶然にも取り上げられることになった事例であるが、とりわけ宗族結合の強さが顕著である広東社会では社会不安、洪水・旱魃等による経済不安の度にこのようなことが行われ不落家も自然消滅の途を辿っていった可能性は大いにある。

あるインフォーマントは（彼女の村は多数の政府役人の家より成立し、多くの家が地主階級であり近隣の村から小作を雇って働かせ彼ら自身は広州・香港にでかけている。

彼女の父親には一人の妻がいた）不落家は村の伝統であり彼女自身も不落家慣習に則った結婚を行ったが多くの娘が教育を受けるため、結婚は比較的遅く（二十歳頃婚礼を挙げる）不落家の期間も通常より短縮され三年に満たなかったと述べている。インフォーマントは不落家期間の短さの理由を教育期間の長さ故であるとしみなしているがStockfordは漢族社会文化に接近した社会における不落家慣習の廃止・縮小を望む政府役人と中国（漢族）政治システム・主流結婚システム（北方中国文化の婚姻）の浸透によると述べ、更に行政中心地の政府役人の多い地域では不落家の発生率は低く、これは清・中華帝国による政治的圧力であると結論づけている。非常に大きな力を持つ宗族では地域行政の官僚になることで政治とのつながりを強め、利を得、更なる発展を目指すという宗族発展のパターンはデルタで古くからみられていた。このようなパターンが民衆の直接的な漢化の原因になるのか定かではないが彼らの意識も次第に漢化されていくと考えられる。しかし不落家を行わない地域との通婚によって不落家が行われなくなり中国文化の主流である婚姻形態がとられていったこと、南雄珠幾巷説にみられるようにその出自を漢族とすることよりやはり意識上での漢化が進行していったと考えるのは妥当である。

以上たった二人のインフォーマントの証言ではあるが不落家の衰退の原因・過程を推測してみた。

・蚕糸業衰退に伴う不落家の衰退

一九二〇年代後半のデルタの蚕糸業の衰退は明らかに不落家の衰退の要因となった。製糸工場で働く女工たちは大幅な賃金カット・解雇の憂き目にあった。解雇された女たちの夫方居住の移行は夫・姻戚・妾（第二夫人。Stockfordの調査では当時製糸工場で働く女工たちの多くは代償結婚を行い、不落家の期間を長期に亘って延長していた。彼女たちは賃金の一部を夫方に支払い続けることによって第一夫人としてのメンツを保っていた。）によって拒否され、多くの女は香港、シンガポール、マカオに渡り家政婦となって生計をたてていった。広東のある権威者は「夫方との交渉のない身寄りのない年寄り」である彼女たちを収容するための建物を建ててやらなければならなかった。又、実家との交渉の絶えた自梳女もその建物の居住者になった。姻戚、実家が彼女たちの居住を拒否した理由として彼女たちに経済価値が見いだせなくなったこと、これによる彼女たちの家庭での権威の失墜、家庭経済の悪化、製糸工場に対して起こしたストライキをめぐるの宗族・家庭との確執が考えられる。とりわけデルタにおいて蚕糸業に携わっている地域では家族全員が蚕糸業に関わってい

るため蚕糸業衰退による経済的打撃は大きいものであった。蚕糸業の衰退は先ず不落家から派生した代償結婚、自梳女の習慣を衰退させた。では不落家自体はどうであろうか。Stockfordのあるインフォーマントは不落家は日本軍の占領期間に終わったと述べている。しかし彼はその後の追跡調査を行っておらず、デルタの結婚形態の変化の様子は明確ではない。蚕糸業の衰退は明らかにデルタの女性の位置付け・結婚形態を変容させることになった。更に蚕糸業の衰退は女工の製糸工場に対するストライキを頻繁に誘発することになり、それに対抗する工場経営者と経営者側についた地方郷紳、宗族の長老との衝突は当時のデルタの社会状況を不安定にし彼ら自身の生活が変容する中で結婚形態も当然のことながら変化していったと推測することができ

る。この章では漢化が進行する社会で非漢族文化とされる不落家習慣の衰退の原因を推測してみた。デルタでみられる習慣を取り扱ってきたためデルタ社会の追究に終始一貫することになってしまった。デルタでは漢民族ではなく原住民が古来より社会を構成してきた。このことは少なくとも広東省全域にわたってもいえることであり広東省ではデルタの不落家のような原住民文化の残存が近代までみられることは大いに考えられる。デルタの不落家は偶然にも

文化人類学者の目に止まり詳しく調査されることになったが他の地域の文化・習慣はどう近代まで残存し消滅したのか、又どう追究されているのであろうか。不落家は順徳を中心としたデルタで清末までみられた習慣であるが何故広州という大都市に近い地域で近代まで残存したのか、何故デルタの周縁部ではみられないのか、疑問は尽きない。これらの疑問は今後の研究・調査によって追究されていくべきである。

まとめ

今回の論文ではデルタの不落家が非漢族文化を起源とし進行する社会・文化の漢化の中においても存続し、次第に変容・縮小し清末には衰退したということが明らかになり、Stockfordの「不落家の形成は漢族中国文化を伴った異民族文化である」という推測を裏付けることになった。と同時に不落家、不落家のみられる社会についての理解が深められた。ここでは不落家を文化・社会の枠でとらえてきたが、既に述べたように、人間同士の様々な駆け引きが生活に展開される社会の中で不落家には若者たちの自然な精神・身体が発達に合わせて日常生活を展開させていく機能がみられるという点で不落家は大いにその意義が認められるべきである。

地域をデルタ・華南に限って不落家の研究を進めていったが、日本にも類似した習慣・社会がみられる可能性は大きいにありうる。研究対象範囲を拡大することによって互いの文化のつながりの研究にまで発展することができる。研究対象を日本にまで広げることによって日本と華南の関係の研究に貢献することができるであろう。この点は今後の研究に委ねる。

収集した文献の質・量については決して満足のいくものではなかった。今後更に研究を続けていくうえで文献の充実を図りたい。

註

(1) 社会学者。シンガポールの大学の学生であった一九五〇年代に、シンガポールに移住したデルタ出身者を対象に調査を行った。

(2) 代償結婚―不落家に抗した結婚形態として清末のデルタにみられた。妻が夫方と別居期間の延長を交渉、再契約することである。この契約に際し妻が夫方に賠償金を支払う。この賠償金には妻自身の経済活動による収入をあてており、夫方で家事労働、出産、育児に従事する第二夫人を買うために使われている。賠償金を支払い夫に第二夫人を買い与え、その後も夫方に対して経済貢献を続ける限り本妻の地位は維持され、死後の位牌も夫方祠堂で安置される。以上がデルタでみ

られた代償結婚である。中国文化でみられる代償結婚は望ましくない結婚の再交渉、再契約であった。

自梳女―未婚を決意した女性のことである。代償結婚は女性にとって経済的負担の重い結婚であった。そこで経済的負担を軽減して夫方居住を回避できる形態として代償結婚の後流行したのが自梳女である。彼女たちは結婚を拒否し製糸工場等での労働を続けた。自梳女は中国文化においては裕福な家が娘にも財産相続し、娘に経済活動をさせずとも長く扶養できることを誇示するため利用された手段であった。

冥婚―冥婚は婚礼を挙げずに死去した死者のために交渉される結婚であり広い地域で行われていた。本来の目的は死者の鎮魂と家の継続である。デルタでは結婚回避を望むものの死後の子孫による祭祀を希望する女性によって利用された手段であり死者（男）との形式上の結婚で自由な生活を享受できた。

(3) Stockfordはデルタの結婚形態の変遷を明確にした。彼はデルタの伝統的結婚形態である不落家に抗する形態が代償結婚に始まり続いて自梳女、冥婚の順で変遷していったことを発見した。彼女たちの拒婚思想は蚕糸業の発展に伴う経済活動に参加する機会の増加と結婚に対する反感によって形成された。

(4) デルタの一部に未婚女性による自治活動組織がみられ、女仔屋とはこの活動が行われる建物の呼称である。北方中国文化でみられる女性組織が既婚女性によって婚家先で組織されるのに対し、デルタでは未婚女性によって組織されるため自分の出生した地域で組織されている点で特徴的であると

Stockfordは述べている。女仔屋は親戚・近所の娘たちによって五、六人で構成される。彼女たちは夜間を女仔屋で過ごし、様々な自治活動を行う。女仔屋での生活・活動は彼女たちにとって楽しみであり、意義あるものだった。Tooleyは女仔屋と同様な機能をもつ男子屋との比較によって女仔屋の機能を次のように列挙している。

- ・睡眠の場、娯楽の場
- ・地域外からの女性訪問者のための宿
- ・夜間時の家の混雑の緩和（睡眠空間の確保）
- ・女性の憤み（夜間時の排泄、馬桶は盗難を避けるために屋内に置かれる）
- ・実家からの直接の出嫁の禁忌（実家から直接出嫁することは不吉とされていた）

「Tooleyは建設物として女仔屋の機能を挙げているが女仔屋で行われる活動、女仔屋の存在が人々に対して与える影響という点からみると女仔屋がデルタの不落家と密接不可分な関係にあると私はみている。またStockfordの調査で女仔屋のみられる地域は不落家のみられる地域を包括し更により広い範囲でみられており不落家は女仔屋なしには存続しえないということが推測できる。

(5) 瑶族に関しては姚舜安の一九五八年の調査と彼のその後の研究をまとめた著書を出典としている。その他の民族は民主改革（一九五二年頃より一九五六年頃の時期）以前の各研究者による調査・研究をまとめた『中国少数民族婚姻家庭』を出典。解放前の各民族社会の様子について述べている。

(6) 陳秀英「布依族」『中国少数民族婚姻家庭』

中国華南における不落家の起源・形成（桑名）

- (7) 牧野異、p170 牧野氏は言語研究より隋・唐時代、南越の固有語はタイ語系であったこと、又宗族結合の強さが現代の広東人に見られるがタイ族にも宗族的な結合の強さがありこれらはタイ族固有の風俗にその起源が求められること等より広東原住民族タイ族説の裏付けを試みたがこれらも推測にすぎない。

- (8) 南雄珠幾巷説 珠江流域・珠江デルタを中心に広東人の間にその祖先が南宋末に南雄（珠江の支流、北江の支流である珠江に臨みその北は江西省に接している。）の珠幾巷から移住してきたという伝説が広まっており遅くとも明末清初には伝えられていた。このような伝説が広まったのは祖先を漢族に求めることで自己のアイデンティティを高めようとする宗族にとって利用価値のある話であったからであろう。南雄は宋代にこの地方において最も文化水準の高い県として有名であった。

- (9) 上原重美。Eng, Robert Yeek, 1986

参考文献

- 嚴汝嫻主編、江守五夫監訳、百田弥栄子・曾士才・栗原悟訳『世界の民族誌5 婚姻からみた中国少数民族上』六興出版一九九一
W・エバーハルト著、白鳥芳郎監訳『古代中国の地方文化』六興出版、一九八七
村武精一著『家と女性の民俗誌』新曜社、一九九一
牧野異著『牧野異著作集 第五巻 中国の移住伝説 広東原住民族考』御茶の水書房、一九八五

河原正博著『漢民族華南発展史研究』吉川弘文館、一九八四
上原重美著、蚕糸業同業組合中央会編『支那蚕糸業大観』一九二九

『アジア歴史事典』平凡社

姚舜安著『瑶族民俗』吉林教育出版社、一九九一

嚴汝嫻主編『中国少数民族婚姻家庭』中国婦女出版社、一九八六

金生著『粵桂的「自梳女」和「不落家」』『東方雜誌』三二卷八号

Topley, Marjorie. 1975. Marriage Resistance in Rural Kuangtung, in *Women in Chinese Society*, ed. Margery Wolf and Roxane Wilke, pp67~88. Stanford University Press.

Stockford, Janice E. 1989. *Daughters of the Canton Delta: Marriage Patterns and Economic Strategies in South China 1860~1930*. Stanford University Press.

Robert F. Spencer and S. A. Barnett. Notes on a Bachelor House in the South China Area, *American Anthropologist*, (July~Sept, 1948)

Gray, John Henry. 1978. *China: A History of the Laws, Manners and Customs of the People*, vol. 1, London: Macmillan.

Eng, Robert Yeek. 1986. *Economic Imperialism in China: Silk Production and Exports 1861~1932*

（跡見学園中・高校図書館蔵書）